

全日本大学野球に初出場



全日本大学野球選手権を前に、ティー打撃に取り
組む選手ら＝3日、角田市の仙台大野球場

仙台六大学野球の春季リーグを34年（67季）ぶりに制した仙台大が、10日に東京・神宮球場などで開幕する全日本大学野球選手権に初出場する。東北以北で唯一の体育系大学で、体操、ボートなどでは学生や卒業生が国際大会で活躍する半面、野球では実績を残せずにいた。部員の意識改革など、指導陣が模索した10年越しの強化策がようやく結実した。

仙台大 10年越し強化結実

仙台大は1975、80年の秋季リーグで優勝したが、東北、北海道地区の代表決定戦に敗れるなどとして、全国大会に出場できなかった。低迷した野球部に97年、転機が訪れる。当時の柔道部長と同じ文部省（現文部科学省）にいた縁で向井正剛さん（79）が教授に招かれた。岡山東商高監督として65年春の甲子園で優勝に導いた名将で野球部長として部員の意識改革に努めた。

「当時の部員は二十数人。グラウンドに草が生えており、草むしりから始めた」と向井さん。岡山東商高時代と同様「技術もマナーも日本一」を目標に据え、野球に取り組

意識改革 指導の柱

あす初戦「代表に恥じぬ試合を」

む姿勢から見直した。強豪の東北福祉大や東北学院大にコールド負けを喫していたチームが徐々に変わっていった。

学長になった向井さんは2004年、さらに飛躍を期して同じ筑波大出身で、同大野球部コーチだった森本吉謙さん（39）を監督に据えた。当時20代の森本さんは亜大や明大など強豪校との練習試合を始め、キャンプを全員参加にしてチームの底上げを図った。同窓の筑波大の人脈を生かして全国の強豪高校からも選手が集まり、5年ほど前から部員が100人を超えた。切磋琢磨（せつさたくま）の中で個々の実力も上がった。

今季は3年生右腕の熊原健人投手が急成長、打では昨秋のリーグで打撃3冠に輝いた2年生の主砲松本桃太郎選手が健在で、東北福祉大、東北学院大との史上初のプレーオフを制した。向井さんは「まいた種が実った」と喜ぶ。

初戦は11日。森本監督は「リーグで戦った他の5大学のおかげで成長した。代表として恥ずかしくない試合をする」と語る。